

年頭のご挨拶

林産試験場長 川西博史

あけましておめでとうございます。

2025年の年頭にあたり、皆様に謹んでご挨拶申し上げます。

旧年中は、当場の運営や研究の推進にあたり、多くのご理解ご協力を賜り、誠にありがとうございました。

当场における2024年度に実施中の研究課題ですが、昨年末現在で、戦略研究が1、経常研究が13、共同研究が9、公募型研究が22、受託研究が9、その他が2、合計で56課題となっています。これらの研究課題のほとんどは、国の研究機関や大学、行政、そして民間企業・団体等の皆様との連携、協力、ご支援の下で実施しているものであり、関係の皆様方には改めて厚く御礼申し上げる次第です。

さて、世の中の情勢は、混沌さを増しているようです。ウクライナやパレスチナでの戦争は終結への道筋がいまだ見えず、多くの無辜の市民や子供たちが死傷しているニュースを見ると、本当に心が痛みますし、朝鮮半島や台湾海峡も年々緊張が高まりつつあるように感じます。国内でも、闇バイトによる強盗や殺傷事件が度々起こるようになり、普通の人？でも追い込まれるといとも簡単に重罪を犯すのかと暗澹たる思いになります。スマホの普及で随分と便利になった反面、偏った情報ばかりに触れるようになり、人々の分断が広がっているようにも思えます。我が子も含め、次世代を担う子供たちに、明るい未来を残してあげられるのだろうか、度々不安がよぎります。

年明け早々、ネガティブな話はこれくらいにして、森林、林業、林産業の分野では、どのような明るい未来が描けるでしょうか？林野庁や東大富良野演習林等で活躍された森林科学者の渡邊定元先生は、1994年に出版された「樹木社会学」という著書のなかで、次のように語っています。「人類の課題は工学技術に頼ってきた文明の構築方法を改善し、生物的技術をもって自然の系と調和ある文明へと再編し直すことである。森林は生物情報の宝庫である。これからの文明構築に向けて森林科学の果たす役割は大きい。」

上記の著作の中には出てきませんが、AIやドローン、自動運転などのDXが益々進み、人口減少下でも事業が拡大できるようになることが期待されています。北海道には550万ha、8.6億m³の森林資源があります。ゾーニング等による土壌保全や生物多様性の保全など、公益的機能の発揮を確保しつつ、DXによりこの森林資源を最大限に利用、高度に加工し、高層ビルの構造材等として利用する「都市木造」が出現し、あるいは、セルローズナノファイバーや改質リグニンを利用した工業製品が普通に使われ、樹木やきのこから抽出される様々な化学成分の飲料や食品、薬品等への利用が進み、林業・林産業を超えて、「森林基盤産業」とも言うべき分野が北海道経済の主要なものとなっている…そんな未来を期待したいと思っています。そして、林産試験場では、一つ一つは地味であっても、そうした未来に繋がる可能性のある研究が進められています。

しかしながら、現実もしっかり認識しなければなりません。近年、道内では、木質バイオマスエネルギー利用が大きく増加する一方、製材やパルプ材の需要は減少傾向にあります。バイオマスエネルギーは、再生産可能でカーボンニュートラルという点では優れていますが、伐採後に植林して蓄積が元のレベルに戻るには数十年を要することなどを考慮すると、炭素を長期間固定する製材から、すぐに燃やすエネルギー利用へシフトしているとすれば、これは憂慮すべきことです。また、釧路に大型の集成材工場が進出してくる中、製材業など各地域の木材産業では、どのように今後の経営戦略を描き、どのような技術開発が求められるのか、私ども林産試験場は、そうした地域のニーズを把握し、まずは足下で必要とされる研究を進めるとともに、未来に繋がる研究を進めていきたいと思っています。

本年も引き続きよろしくお願いたします。

